



ニュースレター 第3報の発行に寄せて

岡山大学留学生同窓会 会長

張 紅 (Zhang Hong)

博士(法学)／弁護士(律師)／東方学者

岡山大学法学修士号取得／広島大学法学博士号取得
東京大学先端科学技術研究センター研究員
University of Washington School of Law
Visiting Scholarを経て
現在、岡山大学法学部教授／日本現代中国法学会理事
北京大学法学院客員教授／経済法研究所兼任教授
北京大学政府管理学院兼任研究員
吉林大学法学院兼任教授
独立行政法人中小企業基盤整備機構 アドバイザー
中倫律師事務所顧問



岡山大学留学生同窓会会長の張 紅でございます。日頃は本
部役員ならびに各支部の皆さん方には大変お世話になっており、
この場をお借りして心より感謝申し上げます。

岡山大学留学生同窓会は今年の秋で早くも発足から3年目を
迎えることになります。当会設立の最大の目的は、より多くの
方々に当会へ参加いただき、会員間での親睦活動の活性化なら
びに卒業後の皆様方の仕事への情報源として利用いただける
ネットワークの構築にあります。加えて、皆様方と岡山大学
との絆を更に堅固なものにするところにも主眼をおいておりま
す。

2011年に森田 潔学長が就任され、岡山大学の飛躍的な前進
を期して「森田ビジョン」が学内外に公表されました。その中
で、「国際的な研究・教育拠点としての「美しい学都」」形成が
掲げられ、その一つの方策として、大学の構成員を可能な限り
世界に派遣し、高度な国際化対応能力を付けさせ、さらに、世
界から可能な限り優れた知性、学生、研究者を岡山大学に呼び
込み、岡山大学を世界に向けて創造的な知の成果を発信する大
学にしたいと考えておられます。こうした活動を支援すること

も当同窓会の大きな目的と考えております。

留学生同窓会設立以降の具体的な活動の一つである支部の設
立につきましては、現在のところ、設立順に上海、韓国、長春、
ベトナム、台湾、バングラデシュ、東京と順調に進めて来てお
ります。また、本年は、高雄（5月18日）、広州（6月13日）、
成都（6月16日）、北京（9月27日）、大連（9月28日）支部の
設立も予定されているところでございます。各地区の支部設立
大会に当たっては、学長ならびに荒木理事など岡山大学役員の
ご出席をいただき、経費の一部負担につきましても大学本部の
ご支援を仰ぎつつ、意欲的に進めているところです。

今後も欧米を含めてこの推進力を強化してまいりたいと思っ
ておりますので、未加入地区におかれましても、ご自身の地区
での支部結成に向けてご協力をお願いいたします。

最後になりましたが、「ニュースレター第3報」に寄せられ
た内容を拝見いたしますと、当会の活動主旨を会員の皆さん方
にご理解いただけてきていることが実感されます。本篇をご一
読いただいた皆さんから、まだご覧いただけてない方々には是非
ご紹介くださるようお願いいたします。

岡山大学留学生同窓会 第3号ニュースレター発行にあたって

宣伝担当：姜 波・朴珍希

留学生同窓生の情報を伝える第3号ニュースレターを発行す
るにあたって、更に多くの元留学生と連絡をとり、同窓会の更
なる拡大を期待したいと考えております。

岡山大学留学生同窓会が成立されて3年となりました。この
間、張紅会長をはじめとして、役員及び各支部会員、関係者の
皆様の惜しみないご協力とご支援をいただきまして、留学生同
窓会は世界および地域社会を結ぶ大切なパイプ役として大きく
成長し、前進してまいりました。会員及び関係者の皆様に心よ
り感謝の意を表します。本当にありがとうございます。

この3年間でふりかえって、留学生同窓会は上海支部、韓国
支部、長春支部、ベトナム支部、台湾支部、バングラ支部が相
次いで立ち上がりました。また、北京、広州、高雄、大連、成
都など16の支部が設立準備段階にあります。さらに、重慶、イ
ンドネシア、マレーシア、タイ、アフガニスタン、トルコ、エ
ジプト、ケニア、ガーナ、ブラジル、アメリカ等それぞれの連
絡人と連絡が取れており、準備委員会の立ち上げに着手してい
る次第です。

今後は、森田学長の指示にしたがって、2015年までに世界で

50か所の支部を設立する目標を立て、情報収集と準備作業を行っております。現在、皆様方の多大なご支持をいただき、留学生同窓会会員の登録者はすでに2,000名余りになっております。これは、岡山大学留学生同窓会のネットワークがアジアをはじめ世界に広がっていることの証でございます。これからも多くの会員を招き、旧交を温め、親交を深め、学術交流を促進し、国際交流をはかっていきたいと考えております。

今回のニュースレターに多くの同窓会員から貴重な原稿をいただきまして誠にありがとうございました。留学生時代の思い出、支部立ち上げ会の紹介、研究内容の紹介などで、みなさんのおかげで第3号ニュースレターは内容が豊かな物となりました。会員たちは各国や地域で、さまざまな分野で活躍し、大き

く羽ばたいています。喜ばしい情報を多く寄せていただき、会員を鼓舞し、励まし合って、同窓会が発展する糧になっております。

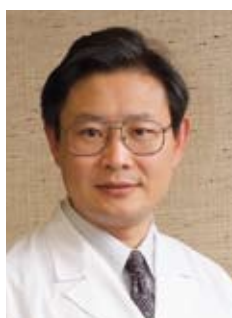
今回のニュースレターは文章スタイルから分けると二つの部分になっております。

1、国内外の情報 2、論文 3、論文概要

今後もニュースレターは、会員の近況、研究成果、企業の情報などを紹介していきたいと思っております。同窓会の更なる発展、岡山大学の国際的存在感を高めるために、皆さんは一役二役果たしましょう。皆さまのご健康とご活躍を祈ります。

国内外の情報

1) 岡山大学発癌遺伝子治療



夢を現実に

岡山大学新医療研究開発センター

賀来 春紀

岡山大学で研究、開発されている癌に対するREIC遺伝子治療の臨床効果が立証され、この度、平成25年3月31日岡山プラザホテルで開催された第二回東アジア遺伝子治療推進懇話会にて岡山大学医

歯薬学研究科の公文裕巳教授（泌尿器病態学）により発表されました。転移性前立腺がんREIC遺伝子治療にてREIC投与されたリンパ節のがんは死滅し、直接投与していない別の場所に転移したがん細胞も大幅に減りました。以下平成25年3月31日の山陽新聞の記事を転記します。



2) 受賞情報



「韓国語教育体験手記」で、

最優秀賞を受賞

岡山大学 非常勤講師 朴 珍希

岡山大学韓国語非常勤講師の朴珍希（パク・ジニ）さんが、2012年11月、韓国・ソウル市にあるデジタルソウル文化芸術大学が全世界を対象にした「第3回 韓国語教育者体験手記公募」で、最優秀賞

を受賞しました。

手記では大学での韓国語教育の実践のみならず、県内各地の公民館を中心とした韓国語教室の開設に加え、ホームステイや日韓交流会による学習を企画するなど積極的に普及を進めてきたことを紹介しました。公募は、2010年から実施され、3回目を迎える2012年は世界15カ国から68人が応募。

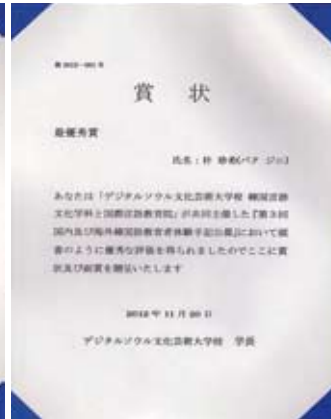
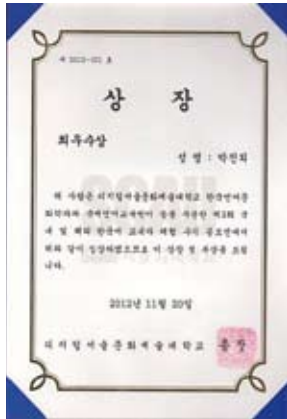
朴さんは、1998年に岡山大学文学部に留学生として入学し、卒業後は岡山大学大学院文学研究科に進み、2004年大学院修了と同時に岡山大学の韓国語非常勤講師を務め始めました。

朴さんが一般市民向けの韓国語教室を始めたのは、岡山大学に在学中の6年間、学生ボランティアのメンバーとして外国人の中学生に数学を教える学習支援をしたり、自分の日本語習得の経験を生かして岡山大学留学生の家族に日本語を教えながら、ミニ韓国語講座を開いたことがきっかけです。講座は当時大ヒットドラマ「冬のソナタ」などの韓流を教材にしたり、韓国料理講座を通じて韓国の文化に触れるなど、親しみやすい内容が好評でした。「語学力を実際に生かしてほしい」と、2005年から年に1～2回、韓国でのホームステイ・日韓文化交流会も企画・運営し、通訳として同行しています。

こういった活動をまとめた手記は、朴さんの教える機に本格

的に勉強を始め、韓国語講師になった20代のみならず、60代、70代の教え子がいるなど、大きな成果を生んでいることが高く評価されました。

第3回 韓国語教育者体験手記：http://class.scau.ac.kr/



language/

(デジタルソウル文化芸術大学校 韓国言語文化学科 ホームページ内)

3) 岡山大学長春事務所の運営



岡山大学留学生同窓会会員

オブリカスム・アプレズ

岡山大学留学生同窓生のオブリカスム・アプレズ氏(男性、中国ウイグル人、トルファン生まれ、2012年3月社会文化科学研究科修了、指導教員：荒木勝教授)が2012年8月1日から、2007年8月に中国長春の東北師範大学に設置された岡山

大学長春事務所で常駐員として勤めるようになりました。

岡山大学長春事務所は海外の大学が中国東北地方で設置した唯一の事務所であり、中国東北地方の研究者との情報交流、本

学への留学を希望する中国人学生への助言・情報提供、東北の各大学に留学している岡山大学の学生・院生への支援、留学生同窓会長春支部の活動支援、本学のPR活動等を行っています。なお、2012年4月には岡山大学北京事務所が、首都師範大学国際文化学院内に設置されている広島大学北京研究センターを共同利用する形で開設されました。

長春事務所住所：吉林省長春市浄月大街2555号(東北師範大学浄月キャンパス・赴日予備校206室)

E-mail: oul117@126.com

電話番号：138 4308 3628

4) 同窓生からのメッセージ

Meltem OKUR DINCISOY Assistant Professor
Faculty of Economic and Administrative Sciences
Trakya University, Turkey

I am Assistant Professor at Trakya University, Faculty of Economic and Administrative Sciences, Edirne, Turkey. I obtained my Master's degree from Graduate School of Humanities and Social Sciences, Faculty of Economics, Department of Comparative Socio-Cultural Science, Okayama University. I had also Ph.D. on Comparative Economics from the same graduate school in March 2010. My research areas are ICT, social and economic development, East Asia, country case studies (specifically for Japan, ROK, and Turkey), regional convergence, and women's development. I have also given lectures on several subjects related to economics and development. While studying at Okayama University, I was

the vice president of the International Students Union of Okayama University and at the same time, the president of Turkish Students Association.

I really spent my most enjoyable and unforgettable seven years in Okayama with the Japanese. I deeply feel always that somehow I am emotionally tied to Japan, its culture and nature. As an experience, Okayama University with all dimensions -my professors, my friends, and staffs- was a grate chance for all parts of my life. As an appreciation, I am very thankful for Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology that I received the scholarship during my master's and doctor's course. Last but not least, I miss many things I had in Okayama and I hope I am missed by Okayama.

5) Report Submitted from Bangladeshi



by : Zaheed Mahmood

Report on establishing Bangladesh Branch of Okayama International Alumni Association

Following is the report regarding the inauguration program of opening the Bangladesh Branch of Okayama International Alumni Association held in the evening of February 24, 2013 at Shundarban Hotel of Dhaka, Bangladesh.

After receiving the decision of establishing the Bangladesh branch, all previous Bangladeshi graduates from Okayama University from Ms and Ph.D courses and residing currently in Bangladesh while being affiliated mostly in different universities and other organizations were informed and motivated duly notifying the importance and benefits of the Alumni Associations and its branch in a bid to take part in the inauguration program of the establishment of the branch. It was the proud privilege of all Bangladesh Alumni to have the following Okayama University Administration and Faculty members taking part in the historical event of inaugurating the branch.

森田潔学長
五藤恵次准教授
岩崎達雄講師
杉本健太郎助教
奥井伸二郎主査

There have also been 2 participants from the main center of Okayama International Alumni Association

同窓会会長：張紅教授

And myself, Zaheed Mahmood

More than 30 Bangladeshi Alumni from different parts of Bangladesh joined the program, most of them are professors in different Universities of Dhaka, Janagirnagar Agriculture and Rajshahi Engineering & Technology University and so on. Note that Both Dhaka and Janhangirnagar Universities are in Dhaka, but Agriculture and Rajshahi Engineering & tech are respectively far north and far west part of the country.

There was a short meeting just before the main program discussing about the formation of an executive committee, purpose of the branch and different activities.



Short meeting with senior Alumni just before the main inauguration program



Bangladeshi Alumni in the inauguration program along with Okayama University president and other honored guests from Japan



Many Alumni took part in the program from different parts of the country with President Morita Sensei, Alumni president Chou Sensei and Chief Administrative of International Center Okui San taking the Chair on the stage.



President Morita Sensei and Alumni President Chou Sensei gave speeches.

At the start of the program, Okayama University president Morita Sensei, Alumni

President Chou Sensei and Chief Administrative of International Center Okui San took the stage and the honored guests were greeted with bouquet by Alumni Dr. Anowara Begum, Professor of Dhaka University.

Morita Sensei and Chou sensei gave speeches, and that followed into the forming of executive committee selecting from the attendants to run the alumni branch. Followings are the names of committee members along with their posts.

1. President : Dr. Sohel Rana
2. General Secretary : Dr. Md. Khorshed Alam
3. Treasurer : Dr. Ms Tawhida Rashid
4. Public Relation : Dr. Syed Shabbir Haider
5. Cultural Secretary : Dr. Munirul Alam
6. Member :
 - (i) Dr. Enamul Haque
 - (ii) Dr. Abdul Alim



Bangladesh Executive Committee members standing behind President Morita Sensei, Alumni President Chou Sensei, & other honored guests from Japan.

(iii) Dr. Ms. Tanjin Akhter

(iv) Dr. Lutful Aziz

The activities of the branch planned are as follows.

- The first job the committee has planned is to complete the database of all Alumni residing in all parts of Bangladesh
- Start communication through mail group, ask advice, suggestion and consent through mails regarding the branch's activities
- Link with main stream of Okayama University International Alumni and exchange technical and cultural information, inform branch's activities and learn main Okayama Alumni's activities
- Introduce other teacher/Student/Researcher to Okayama University.

There were cultural performance of music, song and instrumental symphony by renowned performers at the end of the program.



Renowned performer singing in the program

The program ended with much promise and hope for the branch in the future !

The End

Report Submitted by :

Zaheed Mahmood

March 29, 2013

6) 岡山大学留学生同窓会上海支部新年会報告



上海支部副会長 王海涵

2013年1月12日午後、岡山大学同窓会上海支部が同済大学経済管理学院で開催された。会場となった接待ホールには卒業生の会員が一堂に集まり、支部創立から約1年近くになる今日までの活動を振り返り、また、2013年に実施する行事予定に関して話し合いが行われた。

会場では、支部長の魏鈞原先生がこの一年間に支部会員が積極的に実施した活動を振り返り総括した。例えば、去年6月中旬、会員の王海涵先生が岡山大学留学生同窓会会長張紅先生と事務局長小橋雅行様をお迎えしたこと、また、7月中旬には、魏鈞原先生、殷駿先生の提案のもとで、交通大学の王世平先生のご好意（費用負担など）で上海奉賢区にある交通大学の農學院実験基地を見学させて頂いた。参加者はバラの芳しい匂いの中で、美味しいぶどうなどをいただきながら会員同志で活発な情報交換ができ、積極的な情報共有などの絆を強くした。特に、王世平先生のご接待により30数名の会員は新鮮で美味しい奉賢地方の特産品を味わうことができ、この上ないご懇情に感謝すると同時に忘れがたい思い出となった。

支部長の魏鈞原先生は、続く一年、より多くの会員に呼びかけ更に活発な同窓会活動を展開し、母校岡山大学の名を上海および中国全国に広め、また、上海での岡山大学への学生募集に関して最大の貢献をすることに言及された。

岡山大学留学生同窓会会長の張紅先生はこの年次例会への招待を快く引き受け会議に出席され、その熱意あふれる演説の中で、支部会会員によって過去1年近くの間に実施された各イベントに対して高い評価をされた。今後もこれまで同様岡山大学同窓会上海支部会の各イベントに対して強力に支持し、上海支部会のために母校の力を積極的に駆使し各イベントの展開に協力する旨の言葉があった。

また、当会は、遠く青島や大阪から同窓生である王朝暉氏や孟徳宇氏の積極的な参加を歓迎し、大学や企業の場合について熱心に語らい、最近の中日関係に関する懸念事項についても言及した。また、日資企業や合併企業に籍を置く卒業生から同窓生でもある鄧杰弁護士の法律的援助に対して心からの感謝があった。更に、参加者は相互の連絡と疎通を強化し、当支部会を同窓生すべてに対して配慮の行き届く“同窓生の家”ともいえる組織にすべく誓い合った。

7) 留学への思い



東北師範大学外国語学院 大学院生
李 敏

岡山大学留学生同窓会2011年同窓生

2011年4月O-NECUSの李敏である。

帰国してもうすぐ一年間、このうち、いつも岡山のことを思い出している。日本に留学できるのは私にはいまだに夢みたい。O-NECUSのおかげで、先生から優しいチューターをいただき、勉強のことも、生活のことも、いろいろチューターにお世話になった。最初に日本に行ったとき、他の正規生と違って、一年しかないの、先生に重視してもらえないだろうと心配していたが、日本に来て先生や先輩にいろいろ優しくしていただき、とても心強くなった。今にして

考えると、本当にその一年間勉強したものは人生でも役に立っていると思っている。挫折でも、これから長い長い人生に欠かせない部分だと思う。例えば、専攻は日本語言語学で、やっぱり国内で勉強することより一度日本に来て、本場の言語学を学びたい、何より、岡山大学の勉強雰囲気魅了された、日本に来て勉強できて本当によかったなあと何回も思った。そして生活でもいろいろ勉強させていただいた。一人で料理が作れるし、自立できるようになった。アルバイトを通して日本のことを少しずつ分かるようになった。中国で5年間日本語を勉強していたが、一度もこの身を持って日本という社会を感じなかった、O-NECUSのおかげでこの夢を叶えていただいた。日文の先生と研究室のみんなに感謝している。機会があったらもう一回会いたい、岡山に戻りたい。

8) 近況報告



長春理工大学コンピュータ科学技術学院 副教授
岡山大学留学生同窓会長春分会 副会長
李 奇

2010年岡山大学自然科学研究科で博士学位を取って、中国の長春理工大学コンピュータ科学技術学院に勤めている。帰国した後、脳情報学研究室を創立した。2011年副教授になり、脳情報学研究室の

担当者、コンピュータ科学技術科の副主任に就任する。現在、視聴覚統合のメカニズムを解明する研究を行っている。国家自然科学基金など5個重大的なプロジェクトの代表者になった。

これまでの研究は、視聴覚統合に関するメカニズムについて検討している。しかし、刺激の空間位置による視聴覚統合への影響は十分に解明されていない。今回我々は、聴覚刺激の空間情報による視聴覚への影響について、刺激反応時間と事象関連電位を用いて検討した。視聴覚同時刺激の条件では視覚と聴覚

の空間位置に関係なく、聴覚刺激が視覚空間注意に促進効果を与える傾向が見られた。また、視覚と聴覚刺激が空間位置不一致の場合に比べ、空間位置一致のほうが強い促進効果を与えることが示唆された。

の空間位置に関係なく、聴覚刺激が視覚空間注意に促進効果を与える傾向が見られた。また、視覚と聴覚刺激が空間位置不一致の場合に比べ、空間位置一致のほうが強い促進効果を与えることが示唆された。

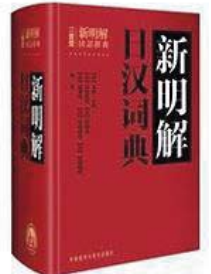
9) 新書紹介



川崎医療福祉大学 姜 波
三省堂によって出された『新明解国語辞典』は、この度北京外語教学与研究出版社によって中国版翻訳されました。翻訳の責任者は岡山大学留学生同窓会上海支部長魏鈞源さんです。彼をはじめとして同済大学と北京地域の大学の教員が共同で8ヶ月の歳月を経て、ついにこの大作を現代中国語に訳されたのです。

第1版は2012年2月に完成され、2,467頁

《新明解日漢辞典》は日本では最も権威があります。この度、中国語に翻訳され、7万3千語が収録されている《新明解日漢辞典》は多くの学習者に愛好され、売れ行きが上々のようです。日中友好の良き理解者が多く輩出することを期待します。



10) 岡山大学広東支部同窓会準備会の報告



華南理工大学 准教授 胡 習之
桜満開の季節の下、広東省内の異なる都市、異なる業界の岡山大学留学同窓生達が中山大學の“紫荆園”ホテルに集まった。参加者には、中山大學、華南理工大学、暨南大學、華南農業大學、広東海洋大學、広東商業學院などの国内、省内の名門大學の教授、国有企業の高官および省レベル病院の医者など各分野の知識人が含まれていた。それぞれの留学時期や留学期間はそれぞれ異なっているものの、約20数年にまたがる留学生の方々である。

6月13日には母校から学長をはじめ恩師と駐広州日本総領事館の官吏を大会にお招きする予定である。

今回の準備委員会には光栄にも岡山大学法学部教授で岡山大学留学生同窓会会長の張紅氏をお招きし、熱意あふれる演説を頂いた。張紅会長のこの演説において、岡山大学森田潔学長から海外留学生へのメッセージ、留学生同窓会長から海外支部に宛てた書簡の披露と、留学生同窓会の創立や海外留学生全体の詳しい状況の紹介と解説がなされ、会場に参集された方々に対して、国際上での母校の知名度を高めるために、また、母校の発展のために一人ひとりが最大の努力を尽くし、母校の恩に報いていただきたいと表明された。

会議では、中山大學外国語學院の佟君教授が今年10月18日～20日に行なわれる岡山大学同窓会第3回大会に参加されることが決定された。

また、今後の広東支部同窓会の活動方針、活動の広報方法および会費などの問題について話し合われ、更に、支部会のロゴマークの設計、ホームページの設計、住所録作成および中国の北京、大連、成都、長春、上海支部同窓会との連携システムについて議論された。

今度、集合いただいた方々の卒業学部構成をみると、岡山大学のほとんどすべてを覆っており、人文科学系の法学部、文学部、自然科学系の工学部、医学部、理学部、農学部、さらに、教育学部などであった。旧知の間の方々や疎遠になっている方々が旧交を温めあるいは初めて顔を合わせる方々も皆さん意気投合し、豊富な話題で盛り上がった。

岡山での留学や研究生活を思い出されたようで、生活面ではとても苦しかったけれども、とても充実していたこと、一円でも節約するために自転車に乗ってToposのような安売りマーケットに行って生活必需品を買ったこと、研究では実験台の前で徹夜したこと、恩師の暖かい指導の思い出や、学友達相互が励まし合ったこと、祖国に貢献するための自信と勇気を固めたことなどが話題となり、また、帰国後の仕事の近況に関して心おきなく話し合われ、非常に盛況であった。

今までに、岡山大学同窓会広東支部の創立大会開催に関して十分な下準備が行なわれ、会場では、中山大學外国語學院の教授（文学部）の佟君氏を岡山大学留学生同窓会広東支部長に、王燕氏（医学部）および周林氏（文学部）を副支部長にと推挙された。なお、近日中に岡山大学同窓会広東支部の創立大会を開催することが決定された。



☆記念写真撮影者：広東海洋大學日本語学部主任 李晶氏
☆議事録作成者：華南理工大学機械・自動車工學院 胡習之（岡山大学理学部、教育学部留学生）

2013年4月7日 中山大學 紫荆園賓館

論文

1 川端文学における美的形象 —「雪国」を中心に—



吉林省東北電力大学国際合作交流センター

王 黎

新潟を舞台とした「雪国」は、川端文学中期の代表作であると同時に、世界中から好評を得ている作品である。世界中の読者に絶賛されるということは、この小説の中に文化の違いを超えて何か普遍的なものが読み取れることを示唆するものであろう。

本論文では、『川端康成全集』第10巻（新潮社、昭和55年4月）に収録されている「雪国」を取り上げ、主に中国人読者としての立場から「雪国」の美的形象を再評価することを試みた。人物描写、自然描写、作品のテーマ・モチーフ、「鏡」の表現効果などを分析することを通して、川端の求めていた「美」がどのようなものであったかを明らかにしようと試みていた。本論文は三章にわたって、作品研究を試みた。

第一章では、「雪国」の成立に至るプロセス、作品の舞台設定から見えるテーマ・モチーフ、先行研究をまとめた。詳しくは以下のようなものである。

一、「雪国」の成立に至るプロセスは複雑である。初筆から決定版『雪国』まで、前後14年が費やされた。決定版『雪国』の内容を大きく変えず、全編にわたって削除や加筆が行われて出来た定本『雪国』まで36年近い年月を要している。また、川端は亡くなる半年前より再び「雪国」を推敲し、毛筆を使って「雪国抄」を執筆した。二、作品の舞台設定からテーマ・モチーフにおいては、肯定的立場と否定的立場とに分かれている。全体的には、川端康成の「美の世界」の核心と彼の虚無思想の特徴の側面から、川端康成の創作思想全体を追究しようとする傾向が見られる。こうした中で割合に目立つのは、作品の構造・形式と思想傾向の関係について述べようとするものである。つまり、島村という人物像と作品全体における作用と意義をどう認識すればいいか、ということである。三、「雪国」の先行研究は同時代の評論を含めて、膨大な量がある。私は今までの「雪国」に関する論文を次の7種類に分けた。人物論、描写論、表現技法の研究、「雪国」を想像によってできたまぼろしの美の世界、非現実の世界としての研究、比較文学の角度からの研究、翻訳についての研究、「雪国」に関する海外の評価。

第二章では、人物描写と自然描写を分析し、作中の人物像と自然から感じられる「美的形象」を明らかにしてみた。視点人物としての島村は、「親譲りの財産で徒食する」、「無為徒食」のお坊ちゃんで、西洋の舞踏に興味を持っていた。彼は人生への虚無感を持っていて、すべてを「徒労」と考える。彼は全身に虚無感の溢れる人である。それに対して、駒子は清潔で、精

一杯生きる人物である。駒子が読んだ小説を一々書き留めていること、日記をつけること、行男の医療費のため芸者になったこと、芸者であっても真面目に暮らして行こうとすること、一生懸命三味線を練習することなどは前向きに生きるしるしである。彼女の身には現実の美を読み取れる。脇役としての葉子を作者は外面から描写していて、内面については全然触れていない。全文には葉子の登場が9回しかなかったが、その「悲しいほど美しい声」は12回も提起されている。彼女が聞く人を悲しい気持ちにさせるぐらい美しい声を持っていることを作者は力を入れて強調している。このほか、葉子の眼に関する描写は6回ある。声と眼の描写が、すべての葉子を表しているようで、彼女の身の上に一種の感覚の美が感じられる。また、「雪国」の中で四季及び一日の移り変わりがはっきり描かれていて、頭の中で、自由にイメージを想像することができる。自然の景色の外に、雪国に生きている人々の生活風景も生き生きと絵巻の上に描かれている。それらの場面を通して、日本でしか見られない風情を楽しむことができる。

第三章においては、「鏡」に関わる描写を取り出して、「鏡」の表現効果について再検討した。「鏡」という言葉は作品の中に38回も出てきている。これだけで、川端が「鏡」にかなり注目していることが考えられる。「夕景色の鏡」、「白い朝の鏡」、「駒子・葉子を映す島村という鏡」及び「鏡」としての「天の河」は単独で現れることはない。いつも人間と自然と一緒に映している。関連のない人間と自然が「鏡」によって一つの場面として切り取られ、融合の美を感じさせる。その鏡を通して見た世界は、時間の持続性が消え、瞬間的な美が無限に延長されているのである。つまり、島村はいつも鋭い審美眼で、意識的に美的な世界を求めている。彼は鋭い審美眼で、現実の世界とは異なる場面に配置された人間と自然を最終的に一つの場に集約するために、鏡という小道具を用いて非現実な美を作ろうとしている。彼は自分の独特な感受性で現実の世界とは別様の世界を作ろうとしているのである。

2 日本における外国語としての韓国語教育の現状と展望

－岡山県内の大学・高等学校を中心に（1990年代～2012年）－

（『朝鮮語教育－理論と実践－』第8号（研究ノート）朝鮮語教育研究会 2013年3月）

朴 珍希（パク・ジニ）



本稿は、岡山県という特定地域の韓国語教育についての分析を通して、その地域の外国語教育としての韓国語教育の過去と現在の状況を明らかにするとともに、その地域にとどまらず、日本での韓国語教育の必要性とこれからの韓国語教育のあり方を模索するきっかけを作り出すことを目的として、岡山県内の大学・高等学校の韓国語教育について考察した。考察の範囲は、①韓国語教育プログラムを通じての韓国語教育の状況と変化、②韓国の教育機関との教育連携の状況とプログラムを通じた文化教育、③国際交流プログラムを通じた韓国語教育の発展、④大学と高等学校における韓国語教育の現状比較、の4点である。考察から得られた結果は以下の3点である。

1. 韓国語教育を実施している県内の教育機関は、大学12校（約70%）、短期大学1校（10%）、高校5校（約5.5%）である。いずれも専門課程ではなく、教養科目として開設している。韓国語教育の開始時期は、大学は1970年度以前から、短期大学は2000年度から、高等学校は1995年度からになるが、大学は2010年度以降、高等学校は2005年度以降、新たに韓国語教育を開設した学校はない。さらに、大学1校は過去6年間韓国語科目を開講しておらず、短期大学1校は2010年度に韓国語教育を中止し、高等学校1校は2013年度から中止する予定である。韓国語の全体履修者数は、大学の場合、日韓ワールドカップ共同開催の2002年度は1997年度の5.3倍増加、2007年度は2002年度の3.8倍増加、2012年度は2007年度の1.5倍増加している。大学が持続的な増加を見せているのに対し、高等学校は2004年度から2008年度までの5年間に増加・減少を繰り返している。このことから明らかなように、各教育機関の韓国語教育に対する深い

関心と体系的な教育課程の確立はもちろん、毎年変化している韓国語教育の状況については、今後も継続的な情報収集と調査が必要であり、その変化に対応できる様々な教育プログラムの構築と学習者の需要に合った韓国語教育を開設し、発展・成長させていく必要がある。

2. 韓国の教育機関と教育協定を結んでいる県内の大学は8校（61.8%）で、高等学校の場合はまだない。教育協定を結んだ韓国の教育機関は2000年度の1校から始まり、2005年度は11校、2010年度は19校に増加している。教育協定校同士の実質的な交流開始の2005年度は岡山から韓国に派遣した学生数が多かったが、2007年以降は韓国から岡山に受け入れた学生数が増えるかに多い。このことから、複数の韓国の協定校との交流が活発に行われていることが分かる。

3. 国際交流を通じた文化教育は、大学4校、高等学校1校で行われている。これは県内の韓国語教育機関18校のうち5校にとどまり、校内の国際交流を通じた文化教育はまだまだ乏しいことが分かった。文化教育は言語教育の効果を高め、言語能力を向上させることはもちろん、その社会や文化についての知識を活用して、円滑なコミュニケーションを可能にする。韓国語教育においても同じことであり、文化教育を通じての韓国文化を背景にした韓国語の認知能力の向上、コミュニケーション能力の向上はもちろんのこと、さらには情報化時代の日韓両国の社会、文化、歴史などの知識の拡充と異文化交流という実践的な体験を通じた国際化への成長を期待することができる。そのためには外国語教育の中で重要な位置を占める文化教育の拡大が必要である。

論文概要

1 中日年金問題比較研究

The study of the comparison between Chinese and Japanese endowment insurance system



吉林大学 崔 棚

岡山大学留学生同窓会長春分会副会長兼秘書長

CUI PENG (Jilin University)

Since twenty-first Century, the global population is rapidly aging. Endowment insurance as the one of social security is becoming more and more important.

At the same time, the current endowment insurance system has been more and more challenge. Therefore, the reform of the endowment insurance has become the focus that academia is discussing and every government also concerns.

The Japanese endowment insurance construction starts very early. It has achieved a "universal pension" target last century. Since entering the new century, with the "low birthrate and aging population" spread quickly, the Japanese endowment insurance is facing a severe test. The Japanese government had undertaken a series of reform. However, such as a long-term pension deficit, "generation gap" problems had never been solved.

China will enter the aging society from 2024 to 2026. The endowment insurance problem is becoming more and more

highly valued for the government. Because of some historical reasons, the construction of Chinese endowment insurance system is still facing many complicated problems. The reform of Chinese endowment insurance system has no ready-made model to follow, not only from the actual economic, social environment and the courage to explore innovative, it is necessary to learn from the experience of foreign countries for reference.

At present, for one country, the population over 60 years old which is taking more than 30% of the total population, the only one is Japan. However, by 2050 this kind of country will reach 64. The whole world is in the face of ageing problem. At least in this century, all other countries will also have to face the aging problem which Japan is bearing. Japan is not a special country, however leading all over the world in the aging problem. At the meanwhile, the Japanese social system design and system construction are also in the forefront of the times. The paper summarizes the right and wrong reform experiences of Japanese endowment insurance which based on the data. Also, it provides some valuable suggestions for the reform of Chinese endowment insurance system.

2 大都市土地拡張の制御、農村と調和発展の促進



吉林省国土資源勘测規画研究院

傅 華

岡山大学留学生同窓会1993年同窓生

中国古代莊子の「天人合一」という思想が、ずっと中国社会の発展に影響している。特に当今城镇化が素早く発展しているうち、都市規模・環境保護及び均衡発展などの問題に面して、如何に人と

人・人と自然の調和を実現するか、更にその精神境界を追求すべきだ。

中国都市化の高速発展が、人と自然と社会の矛盾をもたらしてきた。

主な問題：1. 元都市周囲の耕地・植生・湿地を破壊されたため、都市では「熱島反応」になって、人と自然の平衡を破壊した。2. 大都市の過度拡張で「窪地反応」になり、大都市と中小都市と農村の格差がますます広がった。3. 物件が上がって、バブルになった。その上、都市噪音・交通渋滞だけでなく、

大気汚染で霧霾もかかっている。

主な原因：大都市は殆ど大餅を延ばすような発展様式で広くて拡張している。即ち、「二元」という投資発展様式である。

中国の城镇化の発展を健全な方向にうまく発展させていけば、大都市の大餅を広げるような拡張の制御が必要である。また、科学的な発展観で二元の発展様式を捨て、衛星都市或は城鎮群落を發展して、各地区の均衡發展を保ち、大中小城鎮と農村の統一計画と建設を実現する。

人と自然との調和環境を造るために、「熱島反応」を抑え、いろんな汚染を治め、緑化レベルを高め、人と自然の調和で、田園風景が満ちた城鎮を造れる。

都市と農村・大中小城鎮の間・東西部の間の格差がだんだん小さくさせて、社会諸問題の解決ができる。そのようにして、社会全体で、人と自然が調和發展して、共に進歩していけば、中国古代から今まで「天人合一」という理想的な追求が実現できる。

3 松下圭一の自治体理論の再検討

一日中の自治体再生の手がかりを求めて—『北東アジア経済研究』第10号掲載



岡山大学社会文化科学研究科博士後期課程／吉林大学行政学院博士後期課程

岡山大学留学生同窓会長春分会副会長
孫 悦

最近、岡山大学社会文化研究科の荒木先生、田口先生、築島先生の指導のもとで、論文を作成して、『北東アジア経済研究』第10号に掲載しました。研究論文

の概要は以下です。

政治学者松下圭一は、自治体の危機に対し、次のような歴史認識を提示し、その上に立って彼独自の自治体再生論を展開している。すなわち、松下氏によれば、明治以来高度経済成長期まで、日本の自治体は、確かに地域の人々の生活を維持する役割を果たしてきたが、住民の意識においては、自治体を通じて国に守ってもらうという依存意識が形成された。日本人はオカミ頼り意識が強いし、行政頼り傾向が強固に存続してきた。公の担い手は行政で、行政にすべてお任せという意識が強固に存続してきた。そうした意識に支えられて、国依存、行政依存、

そして、公共事業依存という三つの依存体質が、地方に形成されてきたというのである。

しかしながら、松下氏によれば、日本は1980年代に都市型社会に入ったが、国は依然として官治の方式を支える農村型社会の理念に基づいて行政を推進してきた。今や上からの官治による行政システムと、下からの市民自治による地方自治の方式に大きなギャップが生じた。自治体はこのような官治の依存から脱出するため、国頼り、都道府県頼みから脱却して、自治体が自立の道をさがすしかないと考える。

松下氏は、「市民」と「自治」の理念を再構築し、彼独自の日本社会への観察によって理念を作り、その理念による行政手法を示している。松下氏の自治理論を紹介し、松下氏の自治体改革についての発想と枠組みを示す。その理念に基づく自治体再生構想を紹介していく。また、松下圭一の自治体論の意義およびその限界について検討する。松下により、自治体危機をもたらした最大の原因である、国による官治・集権の自治体運営手法についての問題点を考察する。

4 「芥川龍之介と近代中国文化」



吉林華僑外国語学院 教授 郭 艷萍

岡山大学留学生同窓会長春分会長

「芥川龍之介と中国」に関する研究がたくさんある。それらの研究を調べた上、『芥川龍之介と近代中国文化』をテーマにして、研究プロジェクト、とシリーズ論文を発表した。それを通して芥川龍之介と近代中国及び中国文化との関係を分

析し、全面的に日本近現代文学の主流とその本質を明かにし、中日両国の文化転換中における異同性及び互いに促進する関係を探り、悠久の伝統を持った中国文化が日本明治維新以降に依然としていかに効力を発揮しているか、また中国文学と文化は芥川龍之介に与えた影響及び芥川龍之介が書かれた游记と報道が日本社会、日本民衆にどれほどの影響をもたらしたかをもっ

と深く追求して明かにしたいものだ。

研究意義：中国人の目で芥川龍之介と中国、中国文化及び中国に関する文学作品の分析を通して、総合的に芥川龍之介が中国に対する情趣を探り、どのような気持ちで当時の中国と中国人を見ていたかを把握し、その中国旅行が当時の中国新文化に一体どのような影響をもたらしたか、芥川龍之介の後期の人生及び作品の形式・風格の転換にいかにか大きな役割を果たしたかを見極めることができる。

更にこの研究を通して、中日両国の民衆に中日両国の文学と文化交流の特質を明らかにしたいと思う。中日両国の文化交流の歴史が長い。昔も今も絶えず続けていく必要がある。後人にもそれを理解させて、中日両国の文学と文化の交流を一層深く促進しようと思う。

上海支部・お花見！

上海支部副会長兼幹事長 殷 駿

2013年3月30日（土）朝、上海支部の会員達は、本支部常務副長殷駿氏が所属する上海海事大学ならびに宣伝部長王海涵氏が所属する海洋大学を訪問し、ちょうど満開時期にある桃の花や梨の花などを鑑賞し、美しい春の訪れを寿いだ。

上海海事大学は1909年（清宣統元年、明治42年）に創設され

た103年という長い歴史をもつ航海の技術、経済、管理を主として学ぶ大学。同大学は、清末以来、高等航海教育の歴史がある上海で名門の大学。2004年、上海海運学院から上海海事大学へと名称を変更した。日本では神戸大学や東京海洋大学と交流協定を結んでいる。

会員一行は上海海事大学に隣接する水産物養殖で有名な上海海洋大学の校史館をも見学し、解説担当の方に同大学の概要を聞いた。



岡山大学留学生同窓会役員名簿

役職名	氏 名	現 職 名	E-mail
会 長	張 紅（チョウ コウ）中国	岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授	zhang@law.okayama-u.ac.jp
副 会 長	賀来 春紀（カク ハルキ）中国	岡山大学病院 講師	kaku@md.okayama-u.ac.jp
〃	金 恵淑（キム ヘスク）韓国	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 准教授	hskim@cc.okayama-u.ac.jp
〃	Zaheed Mahmood（ザヒド マハムド）バングラデシュ	マイクロクラフト(株) 品質保証課長	z-mahmood@microcraft.co.jp
〃	姜 波（キョウ ハ）中国	川崎医療福祉大学 教授	jiangbo@mw.kawasaki-m.ac.jp
〃	梁 薇（リャン ウエイ）中国	日本健身気功普及協会 理事長	bushuu@mub.biglobe.ne.jp
幹 事	黄 鵬（コウ ホウ）中国	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 助教	huangpeng509@gmail.com
幹事兼会計	朴 珍希（パク ジニ）韓国	岡山大学 非常勤講師	park12250@yahoo.co.jp
監 査 役	Muhammad Shahbaz Akhtar （ムハンマド・シャハバズ・アフタル）パキスタン	岡山大学大学院環境生命科学研究科 研究員	shahbazak46@gmail.com
顧 問	岡 益己（オカ マスミ）	岡山大学国際センター 教授	moka@cc.okayama-u.ac.jp
顧 問	島田 和久（シマダ カズヒサ）	岡山大学国際センター 准教授（同窓会委員会）	kazuhiisa.shimada@cc.okayama-u.ac.jp
事 務 局 長	小橋 雅行（コバシ マサユキ）	放送大学岡山学習センター 事務長	kobashi-m@ouj.ac.jp
事務局次長	小谷 和夫（コダニ カズオ）	岡山大学国際センター 事務室職員	kotani-k1@adm.okayama-u.ac.jp
事 務 室	山崎 征洋（ヤマサキ マサヒロ）室長		yamasaki-m1@adm.okayama-u.ac.jp
	小野 将寛（オノ マサヒロ）主任		ono-m2@adm.okayama-u.ac.jp
	平井 恵子（ヒライ ケイコ）室員		hirai-k@adm.okayama-u.ac.jp
	中島 嘉子（ナカシマ ヨシコ）室員		ysknksm@cc.okayama-u.ac.jp

お問い合わせ先

岡山大学国際センター 〒700-8530 岡山市北区津島中2-1-1 Phone：086-251-7047 FAX：086-252-5022 Email：int.alumni@cc.okayama-u.ac.jp
事務局長：小橋 雅行（コバシ マサユキ）広報担当：姜 波 jiangbo@mw.kawasaki-m.ac.jp 朴 珍希 park12250@yahoo.co.jp